

これぞ希代きたいのためしなる―「藤戸」の構想

山口県立大学教授 稲田秀雄

『平家物語』卷十「藤戸」には、佐々木三郎盛綱の功名談が語られる。備前の児島に平家軍は屋島から集結し、海峡を挟んで藤戸の源氏軍と対峙する。そうした状況の中で、源氏方の佐々木盛綱は、浦の男（漁夫であろう）から、ひそかに馬の渡れる浅瀬のありかを聞き出したが、口封じのため、ただちにその場で男を殺害した。『平家』の表現では「かの男をさしころし、頸かき切つてすてげり」（覚一本）とある。その後、盛綱は教えられた浅瀬を馬で渡り、先陣の手柄を立てることになる。

能「藤戸」の作者は、この貴重な情報提供者に恩賞を与えることもせず殺害に及んだ盛綱の行為に納得がいかなかった。そして、むざむざと殺された男の無念と残された母の恨みに思いを馳せた結果、『平家』の後日談としても、いささか特異な構想の能が作られることになった。

まず、シテ・ワキの関係が被害者と加害者という配置となっている。すなわち、後シテは佐々木盛綱に殺された漁夫の亡霊であり、ワキは彼を殺した当の本人なのである。このような例は、他に世阿弥作の「敦盛」がある。「敦盛」では、シテが敦盛、ワキが熊谷直実出家したところの蓮生法師であり、敦盛を討ち取った本人の前に、その亡霊が現れる。

しかし、「藤戸」の場合は、それだけでなく、殺害された漁夫の母親が前シテとして登場してくる（金剛流には、母が漁夫の子を伴って出る特殊演出―「替装束」もある）。子を死なせた母の悲しみを描く曲には、「隅田川」「摂待」があるが、「藤戸」の場合は、被害者が目前にいて、まさしくその口から子の最期が語られるのである。このように、直接手を下した本人が親に相對して、その子の死を語るといふ設定も他に例がない。

ところで、『平家』には、佐々木盛綱の藤戸合戦における手柄について、

昔より今にいたるまで、馬にて海をわたす事、天竺・震旦はしらず、我朝には希代のためしなり（覚一本）
という賛辞を記す。「希代」とは文字通り「世にも稀なこと」であり、馬で海を渡したことは、まさに希有な戦功なのであった。敵を欺き、時には味方をも出し抜いて、敵を討つためには手段を選ばないのが当時の武士の常であり、そうした行為は「それほど強い非難の対象にはならなかった」（佐伯真二氏『戦場の精神史』）ようで、少なくとも『平家』の本文には、盛綱の行為に対する批判的な言辞はおよそ見当たらないのである。

ところが、能はこの賛辞を利用しつつ、漁夫の殺害を非難する表現に反転させる。後場において、盛綱の前に姿を現した漁夫の亡霊は、

シテ「藤戸の渡瀬教へよとの 仰せも重き岩波の ワキ「河瀬のやうなる浅みの通りを 教へしままに渡りしかば シテ

「弓矢の御名を揚ぐるのみか ワキ「昔より今に至るまで

馬にて海を渡すこと シテ「希代のためしなればとて ウ

キ「この島を御恩に給はる程の シテ「御悦びもわれ故なれば ワキ「いかなる恩をも シテ「賜ふべきに 地「思ひのほかに一命を 召されし事は馬にて 海を渡すよりも これぞ希代のためしなる

と恨みを述べるのである。

このあたりに、盛綱武功談の陰画^{ネガ}としての本曲の構想が明白に見てとれよう。海を馬で渡して立てた「希代」の手柄よりも、その手柄をもたらしした漁夫を殺害した、まさにそのことこそが「希代のためし」なのだといっているのである。

『平家』八坂系諸本の中には、浦の男殺害のくだりに続けて、「返々もなさけなかりし事共也」という文言を付加する本があることはある（奥村家本・城方本等）。しかし、能はそれ以上にはつきりと、盛綱の行為をこのようになかたちで非難しているのである。

それに続く殺害の再現は衝撃的な場面である。能では、この「希代のためし」とした漁夫殺害の有様を、当然ながら後シテである殺された漁夫自身が再現するかたちをとる。その様は、現行各流とも基本的に、刀に擬した杖で自

らの左腋を刺す所作で表現される。

安土桃山期の素人役者である下間少進の『童舞抄』には、「杖を刀にし、如^ニ文言「胸を二刀さす仕舞あり」とあり、すでに現行と同様の型が記されている。それより詳しい『少進能伝書』にも、「氷のごとくなる刀を」云時、左の手をそへ、刀ヲヌク心ニ杖ヲスル也。「ムネノあたり」ト云時一足ス、ム。「さしとをし」ト云時、左の袖の下へサス（両手にて持）」とある（ただし両手で杖を刺すかたち）。ちなみに、室町末期の演出を伝える上掛り系の『妙佐本仕舞付』では、「杖ヲステ、扇ヲヌキ、ムネニカナメノ方ヲツキタツル」とする。杖ではなく、扇の要でもって胸を突く型（「鶴^カ」等の矢当たりの型に似る）であるのが現行とは異なる。

その後、杖を首かせにして、海に押し入れられ、潮に流される所作へと続く。語り本系『平家』は、先に引いたように、おおむね「刺し殺し、頸を切つて捨てた」とあるのみだが、「取テ押ヘテ頸ヲ切テ水ノ底ニソ沈メケル」と語る本（竹柏園本）もある。『平家』の叙述では、漁夫の殺害（及びその死骸の秘匿）は、当然ながら盛綱の視点に沿つて語られるが、能では同じことが、殺された漁夫自身によつて受け身のかたちで語られ、しかもその再現が殺害者の面前で行われるところに異様さがある。

総じて、「藤戸」という能は、佐々木盛綱による武功談の裏返し（反転）として構想されたといえよう。かくて、『平家』の叙述では全く顧みられることのなかった被害者の側に寄り添う視点が確立された。

こうした『平家』の武功談の「裏返し」の例としては、他に世阿弥作「鶴」がある。これは、源頼政による鶴退治の説話（『平家』巻四）を退治された鶴の視点から再構築したともいえる能で、前場で、頼政の視点からの鶴退治の様が述べられ（クセ）、後場では、鶴の亡霊が射落とされ空舟に乗せて流される様を自らの視点で再現する。

「藤戸」もまた、前場で、ワキ盛綱によって漁夫殺害が語られ（語り）、後場では、漁夫の亡霊が殺されて水底に沈められる様を見せるのであり、ほぼ『平家』の叙述に沿った語りと被害者の視点による再現が対置されている（なお、本曲の間狂言として、アイの下人が盛綱先陣のことを語る特殊演出―「先陣楽器」〈大蔵流〉・「大根之渡」〈和泉流〉がある。この場合は、ワキの語りとは別に、『平家』と同じく武功談としての盛綱先陣が語られるのであり、後シテによる殺害再現場面により鋭く対置されることになろう）。

「藤戸」の作者（元雅とする説もある）は不明であるが、『平家』の裏側を読む世阿弥作「鶴」の手法を継承した形跡は認めてよいのではなからうか。その結果、能作品としても他に類を見ないドラマが成立した。これもまた「希代のためし」というべきであろうか。